

INTERVIEW：インタビュー

女優・タレント

杉本 彩_{さん}

女優、公益財団法人動物環境・福祉協会Eva理事長、作家、ダンサー、実業家、プロデューサー、ディレクターと多彩な活動をされている杉本彩さん。女優としての役作りやダンス、動物保護活動との出会いや、活動にける熱い思い、美容と健康に心がけていることなどをお聞きました。

(聞き手・構成：佐藤 光子)



—最近、『いなくなった猫の話』という舞台で、猫と人間のハーフの男の子を引き取り育てるバーのママという役を演じていらっしゃいました。女優として役作りはどのようになさっているのでしょうか。

そうですね、自分と主人公の内面の共通点をたくさん見つけようという努力をします。自分を通して演じるわけなので、共感できないと、リアリティーがないと思うんですよね。まったく自分の中にない感情を演じるというのはすごく難しいことです。その後、きっとこういう髪型なんじゃないか、こういう衣装なんじゃないか、こういう立ち居振る舞いなんじゃないかという外見的なものや、動きにつながっていく感じです。

—今回の舞台の役では、どのようなところが杉本さんとの共通点でしょうか。

舞台の『いなくなった猫の話』に関しては、たぶんあの役は私しか演じられないんじゃないかなと思うくらい、すごくたくさんの共通点を見つけました。ほぼ1人芝居のような、莫大なせりふの量でしたし、時間も、労力も必要ですし、チャレンジすることの覚悟みたいなものが、すごく必要だろうと思ったんですけど、どうしてもこの役柄を演じてみたい気持ちが強くなって。

まず、動物と人間というところを越えて、本当に

1つの縁ある命として、まるで兄弟のように、まるで親子のように、まるで恋人のようにという、いろいろな感情というのが動物とのつながりの中にもあるということ、私自身が経験しているんです。だから、ものすごく私の中ではリアリティーがあったんですね。

運命的な出会いという感じで、長い芸能生活の中でも、そういう作品と出会えることは、そうそうあることじゃないと思ったんですね。

—舞台と映画とテレビの違いはありますか。

全然違います。撮り方も本番に臨むプロセスも、現場の空気感も違いますね。映画とか舞台とか、純粋にいい作品を作ることに集中する、職人気質の人々がいるような現場の雰囲気がすごく好きですね。映画も舞台もそれぞれのよさがありますが、瞬間瞬間を自分が感じたままに表現できる舞台では、俳優が監督のコントロール下にある映画と違い、幕が開けばすべては自分次第。そんな緊張感が自分の気質に合っているように思います。完全燃焼できた時の喜びも舞台ならではかもしれません。

—ダンスもとてもお上手ですが、今もレッスンなどを日常的にされているのですか。

日常的には全然していないですね。今はいろいろやる

ことが多いので時間を捻出するのが大変で、ステージの依頼を受けた時のみ1ヶ月半前から踊る準備を始めます。基本的に踊ることがすごく好きで、言葉に頼らない踊りの表現は究極だと思うんですね。ダンスのステージでは、自分ならではの世界観を探究し作り上げることに喜びを感じます。

— CMでも、ダンスをされているものがありますが、撮影の際は、こういうふうにやってくださいとオーダーがあって、それに合わせて振りを考えるのでしょうか。

それはCMによりますね。通常は振付師の人がいて、商品を生かすための振り付けが用意されていることがほとんどですが、まれに自由に動いてくださいと言われる時もあるんですよ。私は自分でクリエートしていくのがもともと好きなので、曲を聴いて、インスピレーションを感じれば、けっこう自由に体が動くタイプです。

小学校の学芸会のときに、ミュージカルをやったんですけど、私が振り付けをしたというのもありましたね。あと、体育祭のときにチアリーダーで何人かと踊るんですけど、そのときの振り付けも私がやっていたね。だから、子供のころから創作するのが好きだったみたいです。

— 動物保護活動もされていますが、どのようなことをされていたのですか。

もう25年以上、20代のときから、一人で始めました。自分の住んでいる地域の中とか、仕事の行き先とかでたまたま保護を始めたというのがきっかけで、そのうち、近所の人からいろいろな相談を持ちかけられるようになって。「そこで子猫が生まれているけど、今救わないと次の日に取り壊される家だからどうしよう」という相談が来たりして夜中に懐中電灯を持って保護に行ったりしました。

近所の人から野良猫いるけどどうしようという相談があったりとかしてね。20代のときに、近所のバイク工場をやっているおじさんのガレージを借りて、自分のいらなくなったものを全部売り始めて、それを個人の活動費として捻出していたんですね。そのチャリティーバザーがどんどん大きくなってきて、近所の方が商品の搬入のためにトラックを出して手伝ってくれた

りとか、地域に支えられて活動していました。あと、商品が多くなってきたら、その近所の方がトラックを出して搬入の手伝いをしてくれたりとか、本当に地域ぐるみで、やっていました。

— 芸能界以外の方々とのおつきあいもあったんですね。

芸能界の中だけにいると限られた人しか接触しないから、人間や社会のいろいろな側面を見ることって少ないと思うんです。私は幸運にも20代でそういう活動に自ら飛び込んでいったので、人や社会について真実を目にして学ぶ機会がありました。人間の素晴らしさ、人間の怖さや愚かさについても感じる事が様々あり、いい経験になっています。今の活動のベースを作る必要な経験だったと思いますね。

— その後、公益財団法人動物環境・福祉協会Evaを設立して、団体として活動されているわけですけど、きっかけはあったのでしょうか。

10年ぐらい前に、広島に犬の動物園があったんですが、そこが経営破綻して、そのまま100何頭いた犬が放置されて、小さいケージに閉じこめられて餓死したり、共食いしたりとかいう、もう本当にすごく大きな虐待事件があったんです。それを見て、本当にびっくりして、どうしてこんなことが起こるんだろうと思って、とにかく何かできることはないかなと思って広島に飛んだんです。

そこから動物を取り巻くいろいろな問題や法律の未熟さを知り、保護しているだけじゃだめなんだと思ったんですね。やっぱり、根本的なところの問題を解決していかないと、終わりが無いんだということに気づかされました。ずっと一人で啓発になればとできる範囲のことをやっていたんですが、一人の限界も感じていました。そして、もっとみんなに問題に気づいてもらいたい大きな声にしていかないと何も変わらないと思い、組織にする必要性を感じたんです。

芸能の仕事をしながらなので、志を同じくしたサポートしてくれるマンパワーがないとだめだし、法改正においても個人ではなく組織として物申し要望していくことが必要だと思いました。何をやるのも、どれだけの人間が賛同しているのか、その民意を数として明確に示さないと物事は動かないと思ったんです。

——法人としては、どのような活動をされていますか。

普及、啓発がメインですね。自分たちの役割は、全国のさまざまな場所で講演会などを通じ、皆さんに動物福祉や身近な動物問題についてお伝えしています。その時に地元の団体さんから話を聞いたり、地域の自治体に一緒に行って訴えかけていくこともあります。また全国各地で起きているさまざまな動物問題が、日々Evaに寄せられてきます。そういう事案についても、直接対応することもあります。こういったことが、公益法人ならではの自分たちの役割なのかなというところが、3年経ってようやく定まってきたという感じです。

——杉本さんは、子どもに向けて講演されることも多くなってきていますか。

多いですね。こども未来プロジェクトという、動物の命とか問題を通して、子供たちの豊かな心をはぐくむということがテーマになっているプロジェクトもあります。

小学生ぐらいの子供たちの柔軟さというのを目の当たりにして、やっぱりこの時期にいかに心に届く教育をしなければいけないかを実感しています。本当に悲しみが顔からあふれてきたり、怒りがあふれてきたり、いろいろな表情が見えてくるんです。1年ぐらいかけて動物愛護を勉強している小学校の子供たちは、大人と同じぐらいの知識を持っていますし、自分たちにも何かできることがあるんじゃないかということで、具体的に自分は何をしたらいいのかということまでちゃんと踏まえて、発言する子もいます。

——表現者としてのお仕事をされていることは講演活動の際に役に立っていますか。

講演も、最終的に人の心を動かすという作業になってくと思うんです。

人間社会の中で言葉を持たない弱者である動物たちの、痛み苦しみを代弁することがすごく大切で、それを自分の痛みや苦しみとして想像し感じてもらうことで、心を動かしてもらうという作業になってくるんでしょうね。そういう意味では、今まで培ってきた表現力が、現場の臨場感と活動する人々の思い、よりリアルな動物たちの叫びを届けるということに役立っているのかもしれないです。

——『しっぽの声』という漫画の協力もされているということなんですけど、これはどういう形で協力依頼されることになったんですか。

2015年4月に、Evaが六本木の俳優座を10日間借り切って開催したイベントに、小学館の編集長が来てくださったんです。それで、私たちのいろいろなメッセージや、イベントでの内容を見てとても共鳴してくださって、自分もいつか自分の仕事として発信したいと思っているので、その時が来たら、一緒に何か出来るよう頑張りましょうと言われたのですが、その縁があって今回の協力依頼がありました。

協力の仕方としては、全国でどんな問題が起こっているか、なぜ解決出来ないのか、背景にはどんな問題があるかということ、まず原作者の方に全部伝えていきます。そして原作の段階からもチェックさせていただいています。例えば動物愛護団体の活動の仕方とか、ペット流通や動物虐待のことなど、日々起きている事例について膨大な写真と共に詳細にお伝えしています。そして違和感を感じる部分があれば、かなり細かくアドバイスさせていただいています。

——実際に出来上がった漫画を見て、感想はいかがですか。

漫画になったらどれだけいいだろうというのが、ずっと前から私たちが切望していた啓発の形だったので、それが実現したということに、すごく大きな喜びと期待を持っているんです。漫画を読む層ってすごく厚いので、動物に関心を持っていない方も読みますし、さらに単行本になっていきますから、本当に幅広い層に今後啓発していけるだろうという大きい期待感を持っています。いかに本当にリアルな問題を伝えていくか、リアリティーを持ってもらって読んでいただくかということがあるので、細部に至るまで、いろいろなことをこれからも提供していかなくちゃいけない、アドバイスさせていただかなくちゃいけないなという、私たちの責任の重さというのもすごく感じているんです。

——芸能活動もやりながら動物愛護の関係のお仕事もされているということで、大変ですよね。

芸能と動物愛護団体と、あと化粧品のプロデューサーやエステの会社の社長もやっていますから、細かくいろいろなところに時間が割かれていくので、頭を切

り替えるのは確かに大変ですが、瞬発力をもって短期集中するのは、そんなに苦手じゃないだと思います。月によって、バランスの取り方というのは変わってくるんですけども。舞台期間はもちろん講演をお引き受けすることはできないけれども、同時にいくつかのことを抱えているのが常です。それぞれを止めるわけにいかないで、1日の中でも何回も頭を切り替える時があります。

— とてもお忙しいようですが、お休みの日はどのように過ごされているのでしょうか。

家の中でできる作業をしています。例えばブログを書いたり、「Instagram」をアップしたり、財団の方に関するいろいろなお礼状を書いたりとか。現場に行っているとできない仕事、家の中でしかできない仕事をやるというような感じでしょうかね。

— 完全に趣味でやっていることはありますか。

私、まったく趣味がないんです。何でも最初、自分が好きだなと思って始めたことが全部本格化しちゃうので、結局、趣味になっていかないんですよ（笑）。何でもとことんやってしまって、楽しい趣味とかじゃなくなっちゃう。そういうところが昔からあります。

これはもう一生やっていくんだらうなという覚悟の下に、全部始めていることだったりするので、そんなストレスというのはないんですよ。

— 美容について、何か日ごろから気を付けていらっしゃることはありますか。

まず、本当に自分の年齢と肌質に合った化粧品を、自分で開発できているということが、まず大きな助けになっていると思うんです。美顔器の開発に携わってほしいという依頼があると、またとことん、いい美顔器を作りたいというので、一年くらいかけて妥協なくプロデュースすると、やっぱりいいものが上がってくるんですよ。あと、食べるものはかなり気を使っています。

— どんな風に食べ物に気を使っているのですか。

健康と美容ってイコールじゃないですか。健康を保つためにも、体によくはないものはなるべく排除したいという意識があるので、合成添加物は避けています。

たいていの食品に合成添加物が入っているから、表示をよく見て厳選して購入するという大変さは多少ありますけどね。それでも、そうすることで明らかに体調や肌の状態が変わるという実感があるので、続けるべきだと思いますね。野菜ならできる限り有機野菜を買いますし、自分の体は自分で守るという意識が強いです。ハーブティーなんかも、いいと聞けば、ネットで自分の体調や生活に必要な効能の期待できるオーガニックのハーブティーを調べて取り入れたたりもしています。

— 食べ物以外はいかがですか。

結構動いています。スポーツジムに行って運動しているとかじゃなくて、家の中でひたすら片付けていたりとか、動物たちのブラッシングとか、結構ずっと動いているというのもあります。普段はスニーカーでものすごく速い速度で歩きます。

あとは、本当に健康と精神状態って直結だから、なるべく穏やかな精神状態を心掛けています。まあ、いいか、これぐらいでという、いい加減のところをちょっと意識的に作っていくということと、あと、眠さと戦って起きない（笑）。本当に当たり前のことなんですけど、その当たり前のことをちゃんとやるだけでも、ずいぶん違います。それと、太陽の光をちゃんと浴びるようにしています。自律神経と直結なので。

— 最後に、弁護士会や弁護士に期待することがもしあれば、教えていただければと思います。

多くの弁護士さんに、もっと動物愛護に関連した法律について知っていただいて、その問題を抱えている方たちの力になってほしいと思っていて、すごく期待しています。

プロフィール すぎもと・あや

女優、作家、ダンサー、実業家、プロデューサー、ディレクター。「公益財団法人動物環境・福祉協会Eva」の理事長を務め、講演など動物愛護の啓発活動を精力的に行っている。オリバワ事務局心のバリアフリー分科会構成員、上方朗読振興会名誉顧問、京都動物愛護センター名誉センター長、全日本車いすダンスネットワーク特別理事、大阪市のおおさかワンニャン特別大使も務める。著書として、「それでも命を買いますか？—ペットビジネスの闇を支えるのは誰だ—」を出版。小学館ビックコミックオリジナル「しっぽの声」監修。